News of The Japanese Weekend School of New York

BIG APPLE

ニューヨーク補習授業校
56 Harrison St. Suite204
New Rochelle, NY 10801 U.S.A.
Tel:(914)636-3770
Fax:(914)636-7476
平成２６年　２月　７日　No.20
発行責任者：校長　櫻井郁男

よい授業



教員にとって、授業そのものの質の向上には「研究授業」が最も効果的です。授業者の立場から述べると、「授業で評価してほしいこと」を指導案上で明確にして、同僚に見てもらう研修です。

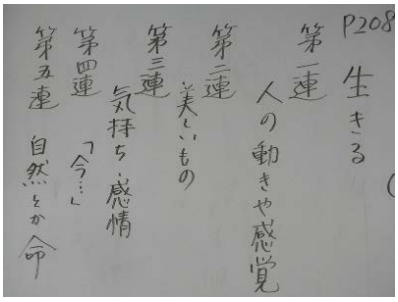
たとえば、「言語活動の充実」をねらいとして、実験的な(先進的な)指導を世に問うことも、教員研究を目的とする大学の附属校では、数年前から盛んにおこなわれています。筑波大学の附属校などがこれにあたります。**教員養成目的**の大学(東京学芸大学等)も目的は多少異なりますが、しばしば授業を教育関係者に公開しています。

本校でも「よい授業」を目指し、様々な研修を実施しています。年に数回の「研究授業」では、担当学年の教員が「授業のねらい」に沿って観察し、評価しあうことはもちろん、参加者自身が目的意識(発問・板書・一人ひとりの生徒への接し方・全体への指示・・・等)を持って、授業を観察し、放課後に指導上の課題や改善策を検討します。しかし、研修に参加する場合、自らの学級は代理の先生にお願いすることになり、しばしば実施することはできません。

そこで、新規採用教員には、派遣教員(校長・教頭)が指導案の作成時点からアドバイスをし、実際の授業を観察し、指導をします。また「巡視授業」として、すべての教員に対して、事前に提出された指導案をもとに、1時間の授業を観察しています。

先日、初等部6年生と高等部の国語を観察する機会がありました。

6年生は締めくくりの時期にふさわしく、谷川俊太郎の詩「生きる」を題材として、指導が行われていました。



詩の学習には様々な「ねらい」があります。叙景詩・叙事詩、定型・不定型詩により、学習のねらいは様々にあります。また、題材によっては時代背景や作者の人生まで踏み込む必要もあります。また、漢文の定型詩では「韻」のふみかたも学習課題になります。日本語で書かれた詩では「韻」に代わる技巧が含まれることもあるでしょう。これらの基本的な学習を踏まえ「鑑賞」に行き着くのです。

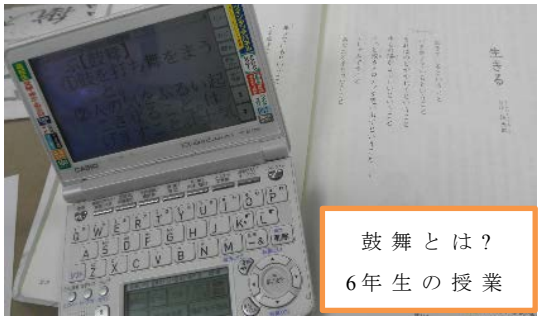
この授業では、作者の膨大な作品群を手際よく紹介し、児童の知っている作品をきっかけに、授業の導入をしていました。教員言葉でいうところの「つかみ」が最適でありました。児童は教師の発問に考え、答えつつ、詩の構成や「韻」に相当する技巧にも気づき、学習を深めていきました。

具体的には作品の各「連」の特徴に着目していたことです。体(五感)・美しいもの(視覚)・感情(心)・今・いのち(生き方)と「連」の内容に子どもたちは引き込まれていきました。

授業の流れで「いいな」と感じたことがあります。

導入後に、児童が心のこもった朗読をしました。本題材の第1時間目であるにもかかわらず、作者そして自分の、思いや考えが伝わるようでした。読み終えた児童に先生は「すばらしい」と感心しつつ褒めていました。彼は褒められたことを生涯忘れないでしょうし、読書好きの人になることでしょう。

また、難しい言葉について児童が質問し、先生が説明し、さらに電子辞書で調べている児童がいました。そして、彼の質問と先生の返答が、ふたりの「やりとり」にとどまらず、学級全体に浸透していく雰囲気でした。



鼓舞とは？
6年生の授業

これは校長・教頭が視ているからではなく、児童と教師が1年間（否、6～7年間）かけて培った本校の学習スタイルなのだろうと、誇らしく思いました。もちろん、児童・教師とも、完璧な学習・指導はありません。

児童数名の姿勢が気になったり、自発的な発言者が少ないなどの課題は今後改善が図られることでしょう。

続いて高等部の国語に臨みました。

「鉄塔に登る」との題材で長文のレポート文を読みこなしていました。この題材は当時の世相・日本人の勤労観・登場人物の心の動き・・・筆者の感動等、読み解くテーマが多岐にわたり、絞ることもできますし、生徒自身にテーマを選択させることもできます。

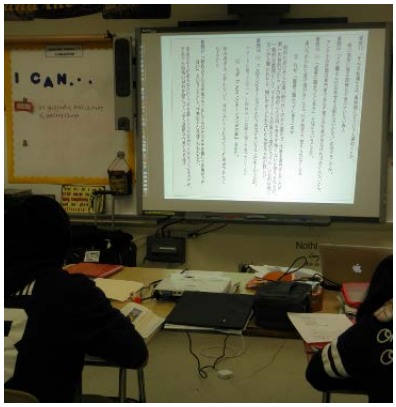
本校の教育目標は「日本語をまなぶこと」ではありません。「学齢に応じた国語」を学ぶことです。　すなわち、学習指導要領の各領域　⑴「話すこと・聞くこと」　⑵「書くこと」　⑶「読むこと」に沿って指導をしていきます。

指導のねらいでは「表現を丹念に読ませて理解させる」とあり、これに沿って生徒との会話を積み重ねていました。さらに、登場人物そして筆者の職業観について触れ、生徒自身の職業に対する意識（考え方）にまで迫っていく綿密に計算された授業でした。

さらに、東京タワーを舞台にしたこの作品をとおして、日本人の精神性にまで踏み込んだ学習指導がなされておりました。

すなわちこの授業は「読むこと」の領域に的を絞った指導でした。

ちょっと教室を覗いただけでは、地味な指導方法としか評価されず、通り過ぎてしまわれるような指導形態でしたが、指導案とワークシートを詳細に分析すると、質問9から質問24までの問いかけは、作品に深く迫らせようとする、教師の意気込みを感じ、それに応じている生徒の様子に、「補習校で学び続けると、ここまで伸びる」と意を強くしました。



論説文と異なり、随想は気軽にさらっと読むこともできます。読書好きの人々はそんな感じで読み物としてこの作品に触れることでしょう。しかし、国語の授業として教材観を明確にし、指導の目的・ねらいを意識した「読書」は「かくあるべき」と認識を新たにしました。

本校は幼児部から高等部まで一貫した教育指導をしております。今回の写真は6年生と高等部の板書です。入学当時には、1文字1文字をたどたどしく写していていた児童が、高等部では「日本語」で「思索」できるようになるのです。

・・・お知らせ・・・

本年度より学習時間の有効活用を主な目的として、配布文書の精査と削減に務めております。その一環としてこの（Big Apple）はホームページに掲載してあります。

経費削減と省資源についても、ご理解下さい。
おかげさまで印刷物は、上半期で65000枚の節減ができました。